

つどい

第 440 号
2025.6.1発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋奈良市富雄丸山古墳出土の
盾形鏡と蛇行剣をめぐって(下)

元大阪府教育庁 西川 寿勝

五 蛇行剣・盾形鏡の副葬意義

次に、今回出土の盾形鏡と蛇行剣の意義などについて、二つの推論を示します。

a 被葬者は副葬品をたずさえ殉死？

まず、今回調査の埋葬施設は墳頂の中心埋葬施設ではなく、墳丘のすそ、明らかに下位の被葬者のものです。報道発表などによると、蛇行剣と盾形鏡は被葬者に対する辟邪^{へきじや}という意見を聞きます。張出し(造出し)の脇から盾形埴輪が出土したこと、円筒埴輪に盾の線刻があったことなど、盾へのこだわりも聞かれます。しかし、古墳時代の

埋葬施設に辟邪の目的があるならば、蛇行剣や盾形鏡が副葬品として普遍的にみつかるはずですが。この被葬者に限って特別な辟邪の道具が必要だったとはいえません。わたしは逆に、副葬品をたずさえるための殉葬者^{じゆんそう}であったと推定します。

『魏志』倭人伝には「卑弥呼もつて死す。大いに冢を作る。径百余歩、殉葬する者、奴婢百余人。」とあります。『日本書紀』垂仁天皇二八年条には、「倭彦命を身狭^{みせ}の桃花鳥坂に葬りまつる。ここに近習の者を集め、ことごとく生けながらにして陵の境界に埋

奈良市富雄丸山古墳出土の

盾形鏡と蛇行剣をめぐって(下) 西川 寿勝

第三十七回定期総会報告

古市古墳群を歩く(古市古墳群南部) 中村 富美子

め立てた。数日を経ても死なず、昼夜泣きうめいた。ついに死んで腐り、イヌ・カラスが集まって食べた。…」とあります。同三二年条で日葉酢媛陵^{ひばすひめのみ}に野見宿禰の進言で人物埴輪を樹てて替わりにした、と伝承します。

『日本書紀』大化二年(六四六年)条のいわゆる大化薄葬令の末尾には「…およそ人が死亡した時、自ら首をくくって殉死したり、あるいは人の首をしめて殉死させたり、無理やり亡き人の馬を殉死させたり、あるいは亡き人のために宝を墓に納めたり、あるいは亡き人のために髪を断ち、脚を刺してしのびごととする。このような旧俗は一切ことごとくやめよ」とあります。

古代の史料に散見される殉葬も、発掘成果ではなかなか確認できませんでした。こ